

外新田遺跡

—市道改良工事等に伴う発掘調査—

1998

長岡市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、長岡市中潟町・六日市町に所在する外新田遺跡（縄文時代中期・後期、平安時代、中世）の一部を通過する市道の改良工事と農業集落排水路工事に伴う発掘調査の記録である。
- 2 調査の経費は、長岡市単独費（土木費）の他、国庫補助金等の交付を受けた。
- 3 本調査は、長岡市教育委員会（教育長 大西厚生）が調査主体となって、平成9年5月12日から7月11日に現場での発掘調査を行い、その後に長岡市役所幸町分室内の埋蔵文化財整理室で報告書作成等の整理作業を行った。
- 4 発掘調査には、駒形敏朗（教育委員会生涯学習課）が文化財保護法上の調査担当者となり、鳥居美栄（教育委員会生涯学習課）が調査員として従事した。作業員には地元有志などの長岡市民が参加した。
- 5 発掘調査で出土した遺物及び図面並びに写真等の記録は、長岡市教育委員会が保管している。
- 6 出土遺物の注記は、トシンデン（遺跡名）・取上げ番号・出土グリッド（若しくは遺構名）・層序の順で記入した。
- 7 掘図のうち、地形図等で方位が示されていない図は真北を上にそろえた。また、遺構図等の矢印は方位（磁北）を示している。
- 8 本書は、整理作業員の協力で駒形が図版の作成から執筆まで行った。
- 9 発掘調査から本書の作成まで、次の方々や機関から御指導と御協力を賜った。記して感謝申し上げる次第である。（五十音順、敬称略）

小熊博史・鈴木俊成・寺崎裕助・広井造・六日市小学校・中潟町町内会

序

この報告書は、外新田遺跡の一部を通過する市道の改良工事と農業集落排水路工事に伴う発掘調査の記録です。

外新田遺跡は、昭和43年に長岡市立岡南中学校と、科学博物館が合同で遺跡の一部を発掘し、ハート形の顔が特徴的な土偶が出土した遺跡として知られています。今回の調査は、縄文時代中期から後期の遺物、それに古代と中世の土器も出土し、断続的ですが長い年月にわたって外新田が生活の舞台になっていたことを示しています。また、縄文時代の土器の打製石斧が、未製品や製作時の破片も含めて大量に出土したことは、外新田で打製石斧の生産が行われていたことを物語っています。

本発掘調査の成果は、縄文時代における生業の一部を知るとともに、三宅神社を中心とする信濃川右岸で、長岡の南部地域の古代から中世にかけての歴史の一端を知ることができました。

本書が、地域の埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるとともに、学術研究に活用されることを願っています。

本発掘調査に当たり、絶大な御協力を賜りました地元町内会をはじめ、関係各位に対し、衷心からお礼を申し上げます。

平成10年3月

長岡市教育委員会

教育長 大西厚生

目 次

I 調査の経緯.....	1
1 調査に至るまで.....	1
2 調査の経過.....	1
II 遺跡.....	2
1 地理的環境.....	2
2 歴史的環境.....	2
3 土層序.....	3
III 遺構・遺物.....	4
1 遺構.....	4
2 繩文時代の遺物.....	4
(1) 繩文土器.....	7
(2) 土製品.....	10
(3) 石器.....	11
3 平安時代・中世の遺物.....	21
IV まとめ.....	21
報告書抄録.....	36

挿図目次

第1図 外新田遺跡の位置図及び周辺の遺跡	2
第2図 土層性状図	3
第3図 外新田遺跡周辺の地形図	3
第4図 繩文土器	4
第5図 調査対象位置図及びグリッド図並びに遺構全体図	5
第6図 堪穴住居跡・方形区画の溝跡	6
第7図 繩文土器出土分布図	7
第8図 土製品・石器出土分布図（1）	14
第9図 土製品	15
第10図 石器出土分布図（2）	17
第11図 石器出土分布図（3）	18
第12図 石器出土分布図（4）	19
第13図 遺物出土分布図（5）	20
第14図 須恵器（1～8）・珠洲焼（9～14）	22

写真目次

写真1 外新田遺跡発掘調査	23
写真2 外新田遺跡発掘調査	24
写真3 繩文土器（1）	25
写真4 繩文土器（2）	26
写真5 繩文土器（3）	27
写真6 繩文土器（4）	28
写真7 繩文土器（5）	29
写真8 繩文土器（6）	30
写真9 繩文土器（7）	31
写真10 土製品・石器（1）	32
写真11 石器（2）	33
写真12 石器（3）	34
写真13 石器（4）	35

I 調査の経緯

1 調査に至るまで

外新田遺跡の発見は古く、1937年発刊の斎藤秀平編『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告』第七輯「新潟県に於ける石器時代遺跡調査報告」の中で、中湯遺跡として紹介されている。その後、住宅地の近くで土器などが採集できる場所として知られ、多くの考古学愛好家が遺跡を訪れ、盛んに遺物の採集活動を行っている。1968年の夏に、長岡市立科学博物館の考古学担当職員であった中村孝三郎嘱託が、長岡市立岡南中学校の多々静治教諭と共に、面積約120m²の発掘調査を行った。調査では、縄文時代中期の長方形の石組炉2基と、縄文後期のハート形土偶などを発掘した（中村孝三郎「外新田遺跡の土偶」NKH第16号1969年、中村孝三郎『外新田遺跡発掘調査報告書』「岡南の郷土誌」岡南の郷土誌編集委員会 1985年）。調査には県内の研究者や大学生に交じて岡南中学校の生徒が多数参加した。

今回の調査は、外新田遺跡の一部を南北に走っている市道の拡幅工事（主管：長岡市土木部土木課）と、市道内での農業集落排水路工事（主管：長岡市農林部農林整備課）に伴うもので、事業が計画された段階から、遺跡の保存方法について事業担当課と数回にわたって協議を行った。協議の結果、遺跡は発掘調査を行って記録を保存すること、調査の経費は事業担当課で見積もり、農業集落排水路工事に着手する平成9年秋までに、現地での発掘調査を行うことで合意した。なお、工事予定箇所が1968年の発掘調査箇所と重複していることなどから、遺跡範囲等の確認調査は実施せず、直接発掘調査に臨んだ。

2 調査の経過（第5図）

外新田遺跡の発掘調査は、平成9年5月15日に市役所幸町分室で調査器材等の準備を行うことから始まった。多数の発掘作業員を動員して発掘を行う20日までに、調査事務所用プレハブの設置、調査機材の搬入、発掘調査の基本杭の打設、発掘残土置き場を開拓パネル板の設置など、発掘調査の諸準備を行う。

発掘調査は、①南側の崖下に設けた発掘残土置き場へ向かってベルトコンベアを設置、②包含層の発掘、③地山面で遺構（黒色土などの落ち込み）の確認作業、④確認した遺構を平板で測量、⑤遺構の発掘、⑥遺構の写真撮影、⑦遺構の測量の手順で進める。出土遺物の水洗いは日常的に、主な遺物への出土位置などの注記は、雨天などの日を利用して現場で行った。

調査グリッドは幅8mの道路法線に沿って、調査地の北東において原点から2×2mを一区画として設定する。名称は原点から南へ1・2~30、西へA・B~Gとし、15G、22Dなどと呼称した。

遺物は、縄文時代中期から後期の遺物のほかに、今回の調査で新たに平安時代の須恵器や土師器、それに中世の珠洲焼が出土した。遺構としては竪穴住居らしい落ち込み、直径1m以上の大ビット、柱穴らしい小ビット、それに方形に巡る溝跡などが確認された。竪穴住居跡は、深さ1m以上の穴が数基重複しており、幸うじて壁と床面が北側で残っているだけであった。また、住居跡と重複する穴の底部からは、近世若しくは近代の陶磁器の破片が出土し、竪穴住居跡が後世においてゴミ穴などで大部分が破損していくことが分かった。大ビットや、小ビットなどからも陶磁器の破片が底部付近から出土し、遺構と思われていた大半の落ち込みは後世のゴミ穴などであり、今回の調査地には遺構が少なく、かつ遺構の遺存状況が極めて劣悪であることも分かった。

外新田遺跡の発掘は、遺構の写真撮影・測量が7月8日に終わり、11日に調査機材と出土遺物、それに測量した図面類などを幸町分室に運び込んで、現場における調査を終了する。

II 遺 蹤

1 地理的環境（第1図・第3図）

長岡市は、信濃川が新潟平野に顔を出すところに位置し、市域を東西に二分するかのよう、ほぼ中央部に信濃川が北へ向かって流れている。信濃川左岸には長野県境の津南町から続く数面の河岸段丘が発達し、右岸には魚沼丘陵に続く東山丘陵が南北に連なっている。

外新田遺跡がある長岡市岡南地区は、東山丘陵が信濃川と最接近する市境の裾部から、徐々に信濃川が西に蛇行して東山丘陵から離れ、右岸に平野が広がり始めるところにある。遺跡は、東山丘陵の裾部に形成された小規模な低位の河岸段丘面に位置している。遺跡の南から西にかけて、東山丘陵に端を発する扇状地が広がり、遺跡は扇状地に面する段丘の南西側縁辺部で、宅地、畠地それに竹林の中に広がっている。遺跡の標高は約45m、南側の扇状地の比高は約3.6mを測る。

2 歴史的環境（第1図）

岡南地区の遺跡は、縄文時代から古代・中世の遺跡が、東山丘陵の裾部の段丘面や沖積地などに点在している。この地区では古代（■）や中世（▲）の遺跡が多く、縄文時代（●）や弥生時代の遺跡は少ない。縄文遺跡の中には、外新田や中湯のように古代と中世と重複している遺跡もある。この地区で古代や中世



第1図 外新田遺跡の位置図及び周辺の遺跡（1/50000 長岡）

外新田（1） 中湯（2） 千足山（3） ソウギバ（4）

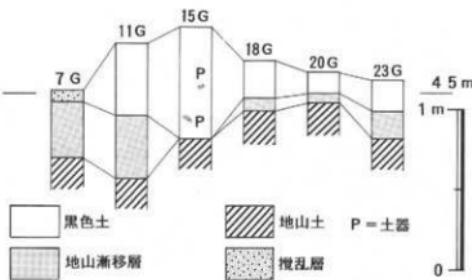
三百刈A（5） 妙見館跡（6） 下ノ坪（7）

の遺跡が多数存在するは、延喜式内社にまつわる説をもつ六日市町と妙見町にある三宅神社と無関係でないだろう。

なお、これまでに岡南地区で発掘調査が行われた遺跡は、外新田遺跡（中村1969年・1985年『前掲書』）と、国道の改良工事（調査主体：新潟県教育委員会）と農業集落排水路工事での妙見館跡（駒形敏朗『妙見館跡』「長岡市内遺跡発掘調査報告書—市立総合博物館建設予定地・妙見館跡—」長岡市教育委員会 1994年）の2カ所だけであり、開発が盛んな市内の他地域と比べて調査例は少ない。

3 土層序（第2図）

外新田遺跡の基本土層は、黒色土（遺物包含層）、地山漸移層、地山の順である。遺物包含層は、15G付近がもっとも厚く、南北へ行くにつれて薄くなりながらも、調査対象地のはば全体に見られた。なお、六日市小学校に近い北側は、戦前に小学校グラウンドの造成が行われ、遺物包含層が削平されている。



第2図 土層柱状図

跡発掘調査報告書—市立総合博物館建設予定地・妙見館跡—（長岡市教育委員会 1994年）の2カ所だけであり、開発が盛んな市内の他地域と比べて調査例は少ない。



第3図 外新田遺跡周辺の地形図（1/10000）

III 遺構・遺物

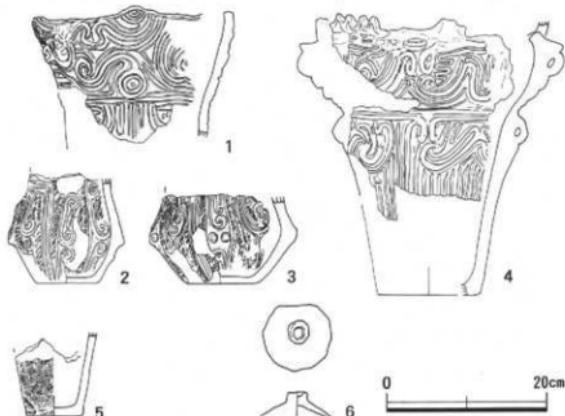
1 遺構（第5図・第6図）

今回の調査では、堅穴住居跡が1軒、方形に巡る溝跡1基などの遺構が発見された。遺構確認作業の段階で遺構と思われる落ち込みが地山面で多数検出されたが、大半が縄文時代の遺物とともに近世・近代の陶磁器の破片が出土し、開墾時に掘り出された縄文土器や打製石斧などを捨てたゴミ穴と思われる。

・堅穴住居跡（第5図・第6図） 堅穴住居跡は19~22D~Fで、円形プランの西側半分が位置していた。堅穴住居跡の施設としては、高さ10cmほどの壁と、床面のごく一部（第6図中の網掛け部分）が残存していただけで、大半の施設は後後に掘られたゴミ穴で破壊していた。遺物は、堅穴住居跡の範囲内から大量の縄文土器と、23本の打製石斧などが出土しているが、近世・近代の陶磁器が底面から出土したゴミ穴と重なる部分からの出土で、確実に住居跡に伴うものかは不明である。

・ビット（第5図） 大小合わせて數十基のビットが位置していたが、このうち陶磁器が出土しないビットは数基に過ぎない。P 2は陶磁器を出土しない径2~2.5m、深さ60cmのビットである。P 2からは縄文中期の土器と、石輪・打製石斧・磨製石斧・凹石・石錘・三脚石器などが出土しているが、覆土が地山土に近い茶褐色土のみで、長岡市内の縄文遺跡のビットに特有な黒色土が含まれていない。出土遺物は縄文時代のものに限られるが、覆土の状況からこれもゴミ穴の可能性を否定できない。縄文中期の遺構とすれば、性格としては土塙墓が考えられる。

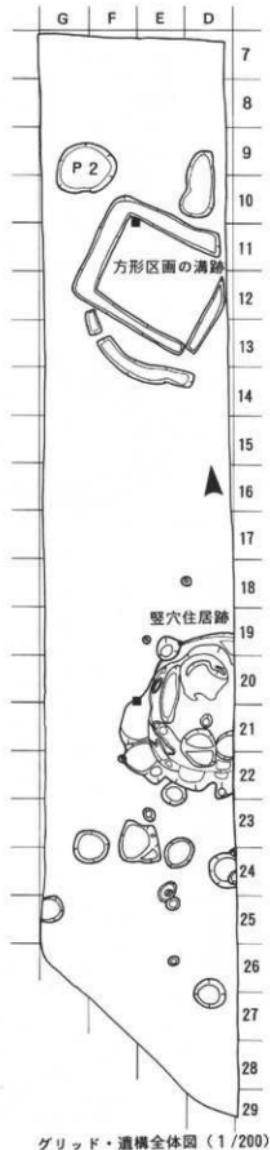
・方形区画の溝跡（第5図・第6図） 調査地の北側で、幅60~100cm、深さ20~40cmの溝が、一辺5~6mの方形に巡っていた。溝跡からは縄文土器と石錘、それに平安時代の土師器の壺が出土している。平面の形態は、方形周溝墓に類似しているが、平安時代の土師器が出土したこと、規模が小さいことなどから方形周溝墓とするには無理がある。ここでは性格不明な方形区画の溝跡としておきたい。場合によっては、作業小屋などの雨垂れ溝の可能性も残されている。



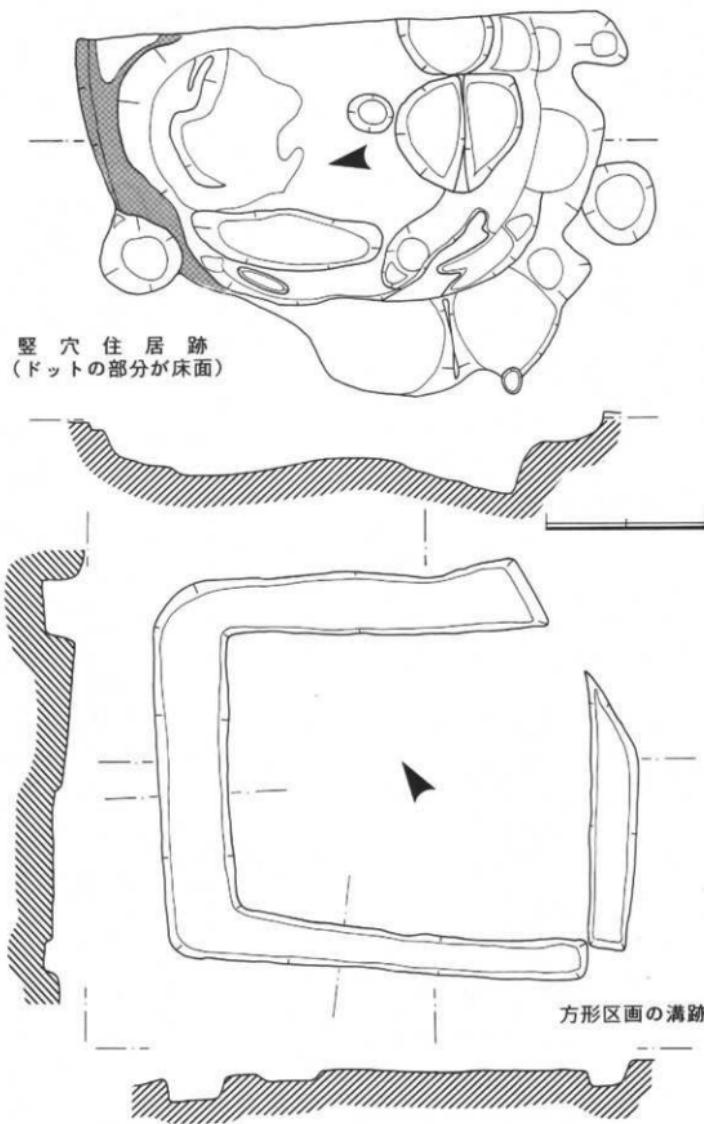
第4図 縄文土器 (1/6)

2 縄文時代の遺物

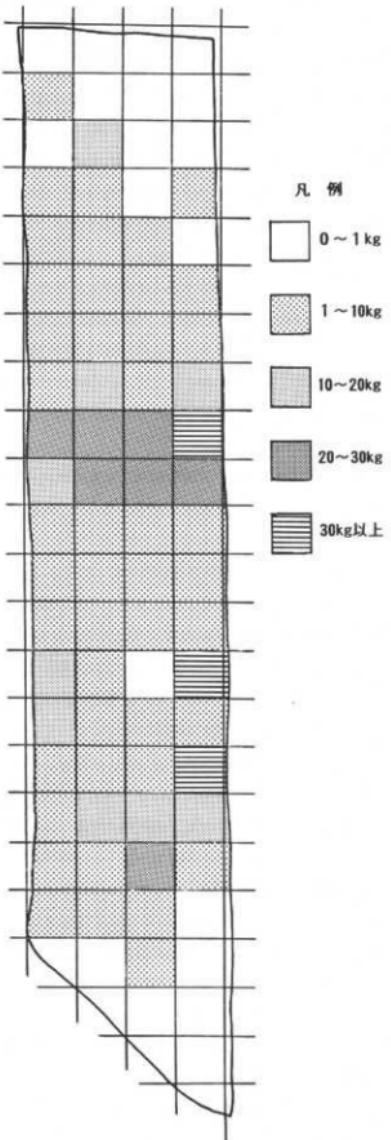
今回の発掘調査で出土した縄文時代の遺物は、縄文中期・後期に属するものが出土している。出土土器の大半は中期の土器であり、時期の特定が困難な石器などの多くは中期に属するものと思われるが、ここでは、時期ごとに分けての記述はせずに一括して取り扱う。



第5図 調査対象地位置図及びグリッド図並びに遺構全体図



第6図 壁穴住居跡・方形区画の溝跡



第7図 縄文土器出土分布図

遺物の分布状況については、基本的に包含層（グリッド）出土とした。これは今回調査の遺構のうち、明らかに縄文時代の遺構と判断できるものが竪穴住居跡のごく一部であり、遺構出土と言い切るには無理があるからである。

(1) 縄文土器（第4図・第7図、写真1～写真7）

縄文土器はグランドの整備で削平された北側と、段丘崖に面する南側を除いた調査地から、破片にして約32,000点（重量約587kg）に上る量が満遍なく出土した。縄文土器の出土は、15・16グリッドに最も集中していた（第7図）。15・16グリッドに隣接する14ラインから北側と、17ラインから南での土器の出土は、20・22Dなどで集中箇所が見られるが、全体的には希薄である。なお、希薄な17～20は1968年調査地である（第5図）。

・縄文中期の土器（第4図1～5、写真1～写真6）

前葉の爪形文土器から後葉の大木10式期の土器が出土している。中でも中葉の火焰形土器や大木8式期が主流である。

前葉の土器には、北陸地方の新崎式土器と、東北地方の大木7b式土器の影響を受けた土器がある。写真1-1～33の土器は、口縁に沿って半截竹管の押し引きによる1条から数条の爪形文が施された土器で、北陸地方の新崎式の影響が濃厚である。器形は、平らな口縁の深鉢形土器が多く、大きな波状口縁の深鉢形土器(32・33)は少ない。爪形文の土器は、縄文を地文として、その上を半截竹管でカマボコ状に盛り上がった平行線による直・曲線のモチーフを施すものが多い。中には、半截竹管で区画された中に描か

れた格子目文（1～3）や、蓮華文風のモチーフ（3）を描いたり、連続の刻目文で平行線の縁を飾っているもの（31～33）などがある。

34～47の土器は、東北地方の大木7b式土器と関係が深い。半截竹管によるカマボコ状の平行線文（34・38～41など）や、ヘラ状工具で平行線を意識した沈線（35～37など）を描くものが多い。39・40の土器は、縦の半截竹管文で区画した中に、平行沈線で流水文若しくは肋骨文風のモチーフを描き出している。39は、縦位区画線や肋骨文風の平行線に、矢羽根状の連続刻みを加えている。43は、連続刻みで縁を飾った平行線で区画しているが、その中は無文となっている。44は粘土紐で縁取られた中を縦の刻目文を充填し、胴部に格子目文が見られる。45は粘土紐で工字文風のモチーフを描出している。48は、粘土紐を三角形状に張り付けた文様で、連続刻目文が縁取っている。新道式に比定される土器である。

写真2-1～18は、前葉の大木7b式から中葉の大木8a式に並行する土器である。1～6は、爪形文若しくは蓮華文から発展した小波状文が施されている。7・8は、半隆起線による縦長の渦巻文の土器で、渦巻文の窪みに連続刻目が加えられている。9～16は、口縁に沿って1条から2条ほどの繩文の原体を押し付けた土器で、斜繩文が胴部に施されている深鉢形土器で、15は真ん中が少し窪んだ小波状口縁の頂部に押圧繩文で円弧などの文様を描いている。17・18は、浅鉢形土器の口縁部破片で、18は方形の突起が付いている。

19～27は、関東地方の渦巻類型の系統を引く土器で、弧状に描かれた文様の中で、1条の隆起線の断面が三角形状に尖ったりしているのが特徴的である。19は大波状口縁の深鉢形土器である。24～26は、連続刻目が加えられている。27は獣面を思わせる突起が、口縁に付いている。

写真2-28～39・写真3-1～31は中期中葉の土器群で、在地の火焰形土器（写真2-28～39・写真3）や王冠形土器（写真4-1～14）のほかに、北陸地方の天神山式土器（写真4-15～19）、東北地方の大木8a式（写真4-20～36）や大木8b式（写真5・写真6-1～31）の系譜を引く土器がある。

写真2-28～32は、火焰形土器の中でも古い段階の土器である。28（第4図1）は、口縁部から胴上半までの大型破片である。器形は、波頂部を欠損した緩やかな波状口縁から、くびれが顕著でない頸部を通り、筒形の胴部へ続く深鉢形である。火焰形土器最大の特徴である鷲頭冠や鋸歯状突起は見られないが、波頂部の残存状況から低い鷲頭冠若しくは鋸歯状の突起があったと思われる。文様は、口縁部から胴部にかけての全面が、半隆起線による横長のS字を意識した渦巻文などで飾られている。渦巻文の真ん中の隆起線は、粘土紐による盛り上がった隆起線で、中心線のようでもある。また、前段階の文様である蓮華文が変化したクネクネ文が半隆起線の中に見られる。このような特徴から、写真2-28（第4図1）の土器は、発生期の火焰形土器と考えられる。写真2-29は、横長のS字状の渦巻文と、蓮華文が変化したモチーフが半截竹管などの沈線で描かれ、渦巻の中心はコンパスの芯のように深くなっている。これも発生期の火焰形土器の仲間である。写真2-33～39は、発生期から若干新しくなった段階の火焰形土器の口縁部破片で、縦長の鷲頭冠への萌芽が見られる。

写真3-1（第4図4）は、完成した段階の火焰形土器で、頸部で大きくくびれたキャリバー形を呈する。鷲頭冠は欠損しているが、口唇部に鋸歯状突起、鷲頭冠の下の口縁に袋状突起が、頸部と胴部との間の眼鏡状の把手が見られ、口縁部と胴部上半部にS字状の渦巻文を中心としたモチーフが描かれ、胴部下半部には縦長の半隆起線が施されている。写真3-2～10・15・16は、火焰形土器の特徴である鷲頭冠の破片、11～14は口縁部の破片、17～43は頸部から胴部の破片である。

写真4-1～3・6・7は、火焰形土器と時期を同じくして出現する王冠形土器の冠状把手の破片であ

る。1・2は大形把手の破片で、橋状把手が付き、頂端部に近い右側がクチバシ状になっている。4・5・8～14は、王冠形土器の頸部から胴部にかけての破片で、半隆起線による渦巻文などが施されている。

写真4-15～19は、北陸地方の天神山式土器の影響を受けた土器群で、文様を描く半隆起線に矢羽根状などに連続刻目を加えている。15は、小波状口縁を呈している。

写真4-20～27は、東北地方の大木8a式土器との関係が色濃い土器群で、縄文を地文として半截竹管で直線文や円弧文、それに波状文を描いている。28・29は大木8a式土器の粗製土器である。斜縄文を全体に施してから、半截竹管の工具で口縁部分の縄文を磨り消している。

写真4-30～36は、口縁に玉抱三叉文（30・31）と工字文風の平行線（31～36）が、半截竹管で描かれている。おそらく大木8a式に平行する在地の土器であろう。

写真5・写真6-1～31は、中期中葉でも後半の大木8b式期の土器である。1～17は胴部の破片で、縱方向に半截竹管による縦長の渦巻文と垂線が描かれている。地文に縄文が施されているもの（9・11～13・15）と、縦長の渦巻文と垂線の間に矢羽根状沈線を充填している例（1～8・10・14～17）がある。1（第4図3）は丸く膨らんだ胴部、2（第4図2）は細長く膨らんだ胴部である。縦長の渦巻文が隆起している。18～20は、口縁部から頸部の破片で、頸部に対応する立体的な渦巻文が施されている。

21～26は、口唇部から口縁部にかけて渦巻文などが描かれている破片で、口縁部の文様帯が無文（21～25）、あるいは縄文（26）となっている。25は胴部上部が残る土器で、半截竹管の平行沈線で無文の口縁と胴部の文様帯を区画し、胴部には縄文を地文として半截竹管による平行沈線で文様が描かれている。

写真5-27～29・写真6-1～12は、ほぼ垂直の口縁に半截竹管で区画された中を矢羽根状あるいは縦長の沈線を密に施し、胴部に向かって傾斜する頸部が無文となるキャリバー形の土器である。口縁は27が三角形に突き出た立体的な把手をもつが、それ以外は小波状口縁である。27はほぼ垂直の口縁に、透かし彫りのように立体的な把手をもつ土器で、把手の正面に玉抱三叉文風に埋められた丸い穴が開けられている。口縁部文様帯は、半截竹管で四角に区画した中を矢羽根状沈線が充填されている。写真5-28・29・写真6-1～12・18・20・21は、小波状口縁の波頭部に渦巻文を立体的に描き、渦巻文から半隆起線が派生して、口縁部文様帯を区画して沈線文を充填している。中には劍先文が渦巻文から派生しているもの（写真5-29）や、波頭部から対の渦巻文の橋状把手をもつもの（写真6-3）もある。

写真6-13～16は、口縁から突き出た把手の破片で、立体的な渦巻文が対になっている。19は箱形状に立体的になった把手で、渦巻文が浮き彫りされている。17は頸部から胴部にかけての渦巻文による橋状把手である。22は口縁部が大きく内凹する浅鉢で、口縁部に縄文を地文とした上に方形区画の文様が施されている。また、補修穴が穿ってある。

23～29は、縄文の地文上に沈線や粘土紐の貼付で文様が描かれた深鉢土器の胴部破片である。28・29には大木8b式の特徴である劍先文が組合わされている。30・31は、幅広の無文口縁が頸部の区画線から大きく外反し、口縁の先端が若干内側に向かって丸くなる土器で、大木8b式に並行する土器である。

32～35は中期後葉の大木9式並行の土器で、大木8b式に見られた区画線ではなく、施された渦巻文が低く、かつ沈線が浅く幅広くなっている。34・35には刻目文が見られる。36は縄文の地文を梢円形に磨り消し、渦巻文などの文様を浮かび上がらせる沈線は明瞭でなく、深い窪みとなっている。中期終末期の大木10式に並行する土器である。

以上は、渦巻文などの文様が施されたいわゆる精製土器の類について、記述してきた。無文や縄文だけの、いわゆる粗製土器は、精製土器の数倍にも上る量が出土している。第4図5は縄文の施文方法や、

土器の製作面などから明らかに中期に属するものである。

・縄文後期の土器（第4図6・写真7）

外新田で出土した縄文後期の土器は、前葉の三十稻場式土器群に限られている。三仏生式土器などの中葉以降の土器は出土していない。

写真7-1～5は、小波状口縁の頂部に瘤が付いた深鉢形土器で、三十稻場式土器群の中でも最古の段階に属するものである。1は縄文の地文を沈線でJ字状に区画して磨り消した文様の土器で、口縁の内側を蓋受けの鈎が巡っている。2は波頂部から若干はずれたところに2個の瘤をもち、頭部に刺突文を加えた隆起線が巡っている。3・4は小波状の瘤を中心に、ハの字状に刺突文（3）、隆起線（4）を伸ばし、縄文施文の胸部文様帶とを区分している。5は口縁がやや内傾する深鉢で、波頂部に瘤をもち、全面にクシ描き文が施されている。

瘤が付いた段階から次の段階になると、橋状把手が出現する。6～14は橋状把手の土器で、頭部を巡る区画線に刺突を加えているもの（7～10・12）がある。中には口縁上端部にも刺突文を加えた例（8・9）もある。無文が多い橋状把手の中で、橋状把手の縁などに刺突文を施した例（7・8）、橋状把手の上に丸い穴を開けた立体的な装飾をもつもの（6）、大きめの穴の橋状把手（12）、小さい穴を穿っている例（14）などがある。6は、胸部に縄文を磨り消したモチーフの部分が見られる。11には橋状把手の下に瘤があり、古い段階の伝統を残している。

口縁と頭部を結ぶ橋状把手は次の段階になると、15～21で見られるように粘土紐を貼付しただけのものに変化する。粘土紐に鉤みを加えたもの（16）や、先端が丸い工具で押圧したもの（18～21）がある。また、口縁と頭部を結ぶ粘土紐を円弧状に貼付しているもの（19・21）がある。円弧状に貼付された粘土紐は押し潰されている。23～26は橋状把手若しくは変化した土器の口縁から頭部の破片で、胸部には撫糸文（23）、斜縄文（24・25）それにクシ描き文（26）が施されている。22は橋状把手の頭部側だけに瘤の盛り上がりがある土器で、刺突で頭部を巡る線を表現している。

三十稻場式土器の文様は、胸部に施文される刺突文が大きな特徴であるが、外新田の三十稻場式は刺突文の土器は少ない。27～32はその数少ない刺突文土器の一例である。また、三十稻場式土器は蓋形土器もその特徴の一つである。33～37は蓋で、33（第4図6）は無文、34は無文の上に刺突を加えた粘土紐を円弧状に貼付したもの、35は細かい刺突文、36は瘤を密に貼付したもの、37は瘤と刺突文を加えている。

38は、口縁に円形の压痕文を巡らす、いわゆる縁帯文土器で、三十稻場式土器群の中でも新しい段階の土器である。縁帯文の段階の土器は、この1点だけに文様が描かれている。

（2）土製品（第9図 写真8-1～30）

今回の外新田遺跡発掘調査で出土した土製品の種別は、土偶・三角形土版・土製耳飾・土器の破片利用の円板状土製品の4種類である。中でも調査面積に比べて三角形土版の出土量が目立つ。土製品の出土位置は第8図に示したとおりで、多く出土したのは土器の出土量が多い地域と重なる15・20・22Dを中心とした範囲である。

・土偶（第9図1～5 写真8-1～4）

1968年の調査では、後期のハート形土偶が出土しているが、今回の調査では後期に属する土偶はない。出土した5点の土偶の時期は、いずれも中期中葉である。また、土偶は欠損したものばかりで、壊れて出土することが多いという土偶出土の傾向を、外新田も示していた。1は頭部が欠損した体部が板状の河童

形土偶Aタイプで、小さい乳房と出へそが貼付されている。文様はごくあっさりしており、水平に広げた腕と胸から腹部まで沈線が施されているだけである。2・3は、1と同じタイプの土偶で、2は胸部、3は右腕の破片である。4は腹部が突き出たように膨らみ、出尻に近い形の河童形土偶Bタイプである。胸から腹部、それに脇腹から背中の周辺部にかけて円弧文などが描かれている。4は大木8a式期の土偶で、1～3は大木8b式段階の土偶である。5は右胸の破片で、おそらく大木8b式段階の土偶であろう。

・三角形土版（第9図6～17 写真8-5～15）

今回の発掘調査では14点の三角形土版が出土している。調査面積に比べて出土量が多いと、経験的に考えられる。三角形土版は、長岡市においては、縄文中期の遺跡に限って出土しており、外新田出土のものも中期の所産と考えられる。

平面は二等辺三角形を呈し、断面が反っているもの（第9図10・11～13）と、平らなもの二通りがある。12・14は二辺をギュッと絞り込んだ平面形を呈し、12は三辺の角が背面側に反っている。

三角形土版の文様は、刺突文を全面若しくは部分的に施すものが多く（6～13・15）、無文は14・16・17の3点にすぎない。部分的に刺突文を施した6～11のモチーフは、底辺の両端部を中心に、区画線に沿つたり（6）、あるいは両端部の広い範囲に施している（7～11）。この場合、左右に2個の瘤状の盛り上がりをもつもの（8～11）や、瘤に刺突文を施す例（8～10）もある。1968年の調査で出土した3点の三角形土版は、いずれも底辺の両角を中心に区画した中だけに刺突文が施されているものである。

三角形土版のはば全面を対象に刺突文を施したのは12の1点だけで、二等辺三角形の頂点部分の破片である13も全面刺突の仲間かと思われる。12の刺突文は、底辺と平行若しくは上下に規則的に並んでいる。3点の角を欠損している15は、他の例よりも中央部が盛り上がり、刺突文は中央部の盛り上がりから放射状に伸びる細い沈線で区画された中に施されている。

三角形土版は、形態的、文様表現的に簡略化した人体を表現しているという意見があり、土偶との関係が取り沙汰されている。刺突文を部分的に施した三角形土版（6～11）は胸を表し、6・7・16・17に見られる平面の中央部にある刺突文は臍を表現したと、受け取ることもできる。今後、土偶との関係から検討を加えてみたい。

・土製耳飾（第9図18～21 写真8-16～19）

中央に穴が貫通し、横がすばまる、いわゆる滑車形の土製耳飾が4点出土した。いずれも縄文中期の耳飾と思われる。中央の穴は大きいものが多いが、20の穴は極端に小さい。また、20の土製耳飾は、周囲が若干欠けてギザギザになっている。

・円板状土製品（第9図22～32 写真8-20～30）

壊れた土器の破片の周囲を研磨した円板状土製品が、今回の発掘で11点出土している。いずれも縄文を施した破片である。円板状土製品の大きさは、おむね直徑3～6cmである。中期・後期の特定はできなかった。なお、研磨箇所はスクリーン・トーンの貼付で表現した（第9図）。

（3）石器（写真8-31～55～写真11）

今回の外新田遺跡発掘調査で出土した石器の種類と数量は第1表のとおりである。中でも119点出土の打製石斧と、15点の三脚石器などの出土が目立つ。このことは、1968年の調査と同じ傾向を示している。

なお、石器の時期区分は、特定することが困難なため、ここでは一括して報告する。

種別・名稱		数量	割合
狩猟具	石鏃	20	5.47
	石槍	1	0.27
漁労具	石錐	37	10.01
農具・工具	磨製石斧	10	2.73
	石錐	4	1.09
	打製石斧	119	32.51
調理具	石匙	2	0.55
	敲石	8	1.91
	凹石	40	10.93
	磨石	33	9.02
	石皿	7	1.91
不定形石器		71	19.40
小計		351	
呪術具?	三脚石器	15	4.10
合計		366	100.00

第1表 外新田遺跡出土石器一覧表
現在のP2から出土した完存品の1点だけである。片面に自然面を残した翼状剥片に、両側縁の両面から二次加工の剝離が見られる。基部は円形状である。素材は安山岩。

・石錐（写真8-50~53）

つまみをもつもの（50~52）と、棒状の石錐（53）の、合計4点の石錐が出土している。つまみをもつ石錐のうち、51・52はつまみと錐が区分できるほど錐が細くなっている。錐部の先端を欠損した50は、肉厚の剥片を利用して作られている。

・打製石斧（写真9-1~20）

外新田出土の打製石斧は、刃部が広がる撥形（1~10）と、基端部から刃部まではほぼ同じ太さの短冊形（11~20）の2種類の形態がある。撥形は63点、短冊形は51点と、撥形が短冊形より若干その数が多い（なお、欠損品で形態分類が不明なものが5点ある）。撥形打製石斧のうち、完形品は37点の58.7%、短冊形の完形品は20点の39.2%と、撥形の完形品の比率が高い。完形品で打製石斧の大きさを見ると、撥形は10~16cmが25点、10cm以下が12点、短冊形は10~16cmが14点、10cm以下が6点である。撥形・短冊形を問わず10~16cmの大きさのものが多い。

打製石斧の破損状態は、刃部側破損が撥形では12点、短冊形で15点、基端側破損は撥形で6点、短冊形で9点、ほぼ中央部の破損は撥形で2点、短冊形で6点で、両端破損が撥形で2点ある。これから、打製石斧は刃部側で破損する例が、形態の違いにかかわらず多い傾向であることが読み取れる。特に、短冊形に刃部側破損の比率が高い。なお、打製石斧の石材は、粘板岩・安山岩・頁岩・砂岩が使用され、特に48点の粘板岩が多く使われている。

1968年調査地を除いた9~25d~gの各グリッドから満遍なく出土している。中でも13~16グリッドと、

・石鏃（写真8-31~48）

今回の調査で出土した石鏃は、全体の形状が分かるものが18点、側縁部の四半分を欠損したものが1点の合計19点である。その他に、未製品が1点出土している。

石鏃は、基部に抉りが入る凹基無茎鏃に分類されるものが16点（33~48）と、出土点数の90%近くを占めている。凹基無茎鏃の中でも、基部の抉りが浅い、深いものの2種類に細分される。写真8-33~37の5点が、抉りが浅いもので、深いものは38~48の11点である。他の2点（31・32）は、基部が平らな平基無茎鏃である。基部が凸基の有茎鏃は1点も出土しなかった。1968年の調査出土の石鏃も凹基無茎鏃だけであった。

石鏃の石材としては、赤い色調の鉄石英と凝灰岩が各7点、チャートと玉髓製の石鏃が各2点、それに黒曜石が1点である。製品としての黒曜石製の石鏃は1点しかないが、剥片の中に黒曜石の破片が数点あり、黒曜石の石鏃が外新田で製作していたことを示している。

・石槍（写真8-49）

今回の調査での石槍は、縄文中期の遺構の可能性が残さ

れているP2から出土した完存品の1点だけである。片面に自然面を残した翼状剥片に、両側縁の両面から

二次加工の剝離が見られる。基部は円形状である。素材は安山岩。

堅穴住居跡を掘り込んだゴミ穴からの出土が目立つ。出土総数は119点で、1968年調査分を合わせると160点に上る。長岡市内の中期遺跡からの打製石斧の出土量は一般的に多い傾向にあるが、それにも外新田遺跡の打製石斧は、調査面積に比べて大量の出土であると経験的に思われる。時期的にも縄文中期のものが圧倒的であると考えられる。

今回の調査で出土した石器の中で打製石斧の比率は、約32%と他を圧倒している。その他にコンテナ2箱以上出土している剝片や石核類に、打製石斧と同じ粘板岩・安山岩などの石材が大量にある。この傾向は既に長岡市史（長岡市『長岡市史1 資料編1』1990年）で触れているように、外新田遺跡で打製石斧を大量に生産していた工房のような性格を帯びていることを示している。さらに刃部を観察すると、刃部がトロトロとして使用の痕跡が明瞭に見られるものが多數あり、生産と同時にここ外新田において、打製石斧が使用されていたことを物語っている。

・磨製石斧（写真9-21～28）

面積に比して大量に出土した打製石斧に対して、磨製石斧の出土数は10点と極端に少ない。そして、わずかに刃部を欠損している写真9-21以外は、基端部か刃部だけの破損品である。完形品の残存率も、打製石斧に比べて低い。欠損の残存状況は、基端部側で破損して基端部残存が1点（24）、基端部側破損で刃部が残るもののが1点（22）、ほぼ中央部で破損して基端部残存が1点（23）、刃部側で破損して刃部側残存が2点（25・28）、両端が破損したのが2点（26）である。他の2点は破片である。

磨製石斧の形態は、定角式磨製石斧と小形磨製石斧の2種類で、定角式の出土数は8点（23～28）、小形磨製石斧は2点（21・22）である。刃部の形態が分かるのは、いずれも両刃の4点（21・22・25・28）である。そのうち、刃の両端が直線的な直刃が小形磨製石斧の2点、両端が丸くなっている円刃は定角式磨製石斧の2点（25・28）である。

・三脚石器（写真9-29～41）

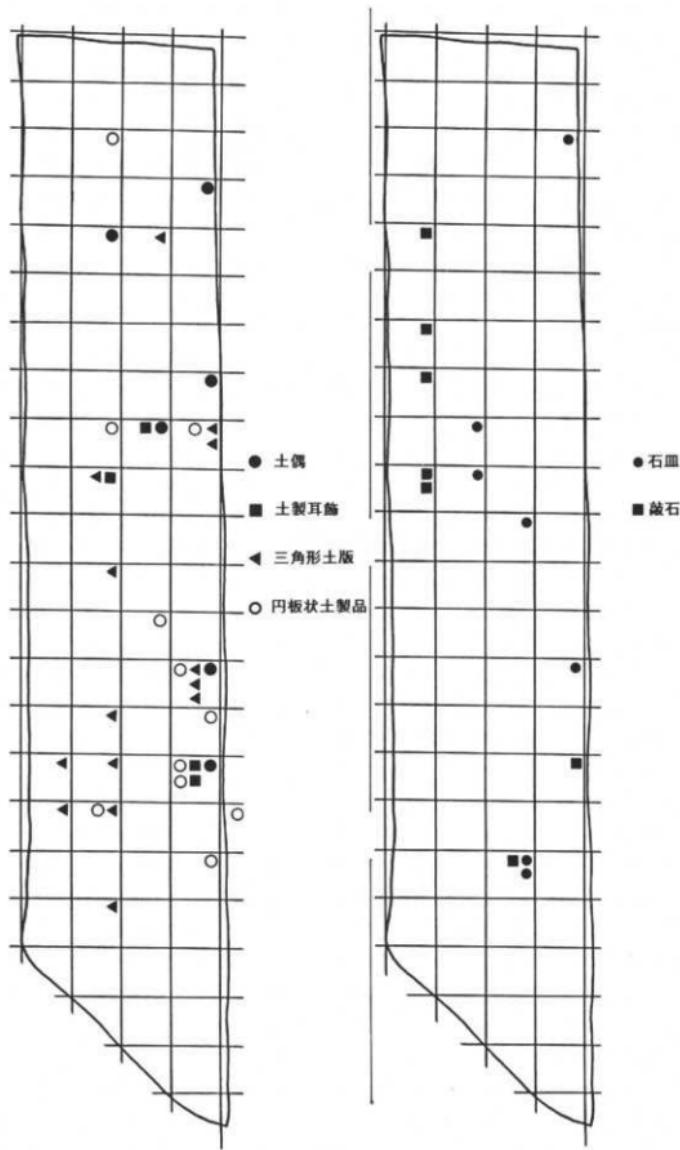
縄文時代中期にはほぼ限定して出土し、形態的には背面がくぼみ、三角形の縁辺を抉り込むように削離した石器で、形態が三角形土版に酷似しているところから、具体的に使用する道具ではなく、心の中で使用する第2の道具という意見もあり、第1表では『呪術具？』とした。だが、石匙や板状石器などの削り具としての用途も考えられるものであり、記述においては『石器』の項目で扱った。

形態的には三角形の二辺の抉り込みが深いもの（30・32～41）と、抉り込みが浅いもの（29・31）の2種類に大別される。抉り込みが深いものは、角のように細くなっているのが特徴的である。

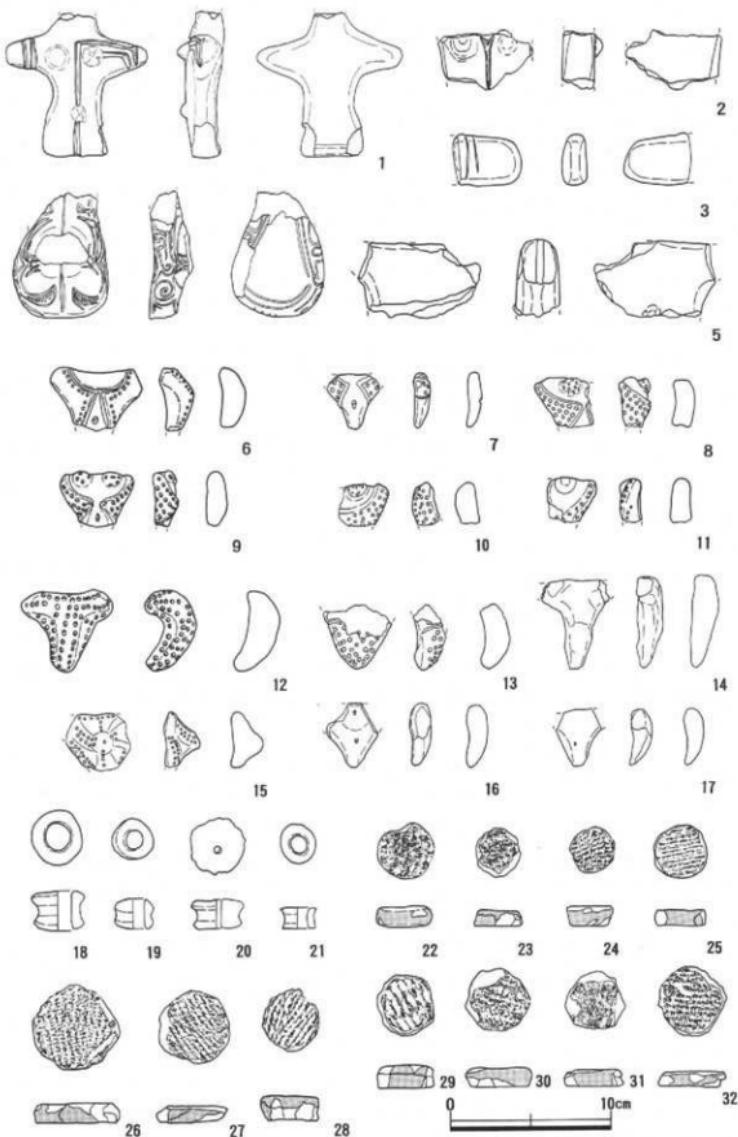
出土位置は、15E・F付近に一つの集中箇所が見られる以外は、散逸的に出土している。出土量は今回の調査で15点、1968年の調査と合わせると22点となり、これも打製石斧と同様に発掘した面積に比べると多いと言えよう。長岡市岩野原遺跡（縄文中・後期）では1点もなく、中道遺跡（縄文末～晩期）では2点の出土に過ぎない。それだけに、外新田の三脚石器の出土量は、特徴的なことがらである。時期的に縄文中期にはほぼ限定され、形態的にも類似する三角形土版と三脚石器の両者が、外新田遺跡で他の遺跡に比べて大量に出土していることの意義はどこにあるのか、今後の検討課題としたい。

・不定形石器（写真10-1～12）

剝片の周辺部にスクレバー状に刃部を作出した石器で、石鏃や石斧などのように定形的な形態を整えていない石器である。不定形石器は、近年になって剝片に対する注目と観察技術が進み、石器として認識されたものである。今回の調査では、スクレバー状の刃部が作られた剝片が71点出土している。出土位置は特に図示していないが、調査地のほぼ全域にわたっている。



第8図 土製品・石器出土分布図（1）



第9図 土製品 (1/3)
土偶 (1~5) 三角形土版 (6~7) 土製耳飾 (18~21) 円板状土製品 (22~32)

形態的には、塊状で全面に加工しているもの（5～10）、剝片の側縁全体を加工調整しているもの（1～4）、部分的な側縁調整（11～12）の3形態がある。石材は粘板岩が主である。

・石錘（写真10～13～39）

礫石錘の37点が出土している。明瞭な切目が入ったり、溝を有する石錘は出土しなかった。礫石錘の網掛けの位置は、4カ所に網掛けの抉りがあるのは写真10～13の1点だけで、他の36点は2カ所であった。石材は砂岩・安山岩がほとんどで、粘板岩と頁岩もある。

重量は20～40gが14点と、全体の40%近くを占めている。また、大きさでは全体の50%近くの18点が3～5cmで、次いで若干大きい5～7cmが14点である。それ以外には4カ所の網掛けの抉りをもつ14と13の2点が、15～17cmの大きさで、他に比べてかなり大きい。

・敲石（写真10～40～43・写真11～1・2）

敲石は扁平錐が2点（写真11～1・2）、棒状錐が5点（写真10～40～43）の計7点が出土している。扁平錐の敲石は、長さ9～10cm、幅7～9cmで、敲打により表面がアバタ状を呈している。

棒状錐の敲石は、長さ9～14cm、直径約3～6cmで、重量は扁平錐敲石の50～60gより重い130～530gである。使用の痕跡は、扁平錐と同じ敲打によるアバタ状を呈して両端に使用痕があるものが4点（40～42）、面的にツブレているものが1点（43）である。使用している石材は、安山岩である。

・磨石（写真11～3～10）

33点出土している磨石は、安山岩を石材に使用している。素材による分類は、扁平錐が25点（3～8）、塊状錐が8点（9～10）である。扁平錐磨石の磨かれた使用痕は、主に平面上に見られるものが2点、他の23点（3～8）は角がなく全面が磨かれている。塊状の磨石は、すべてが全面に使用痕が見られるものである。なお、敲打痕跡があるのは扁平錐・塊状錐を合わせて4点あり、他の石器からの転用である。

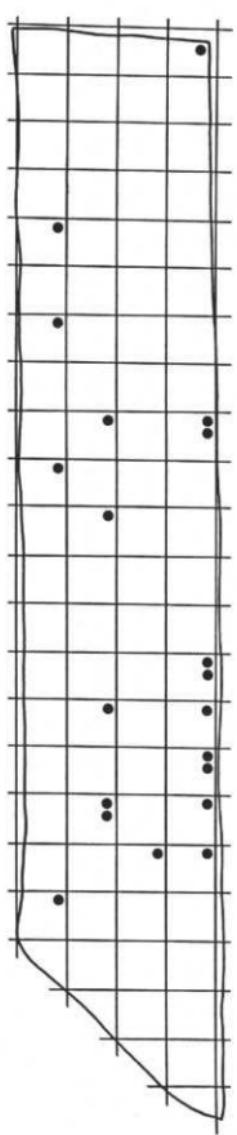
・凹石（写真11～11～17）

両面使用の凹石が30点、片面のみが9点、欠損品1点の40点が出土している。安山岩である。扁平錐や塊状錐それに柱状錐などの素材による分類は、敲石や磨石の他器種と複合するものだけである。

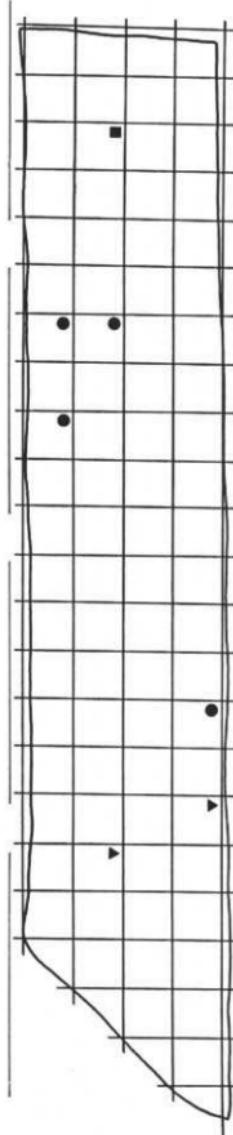
両面使用の凹石は凹みの状況は、次のとおりである。①両面ともに敲打が集中せず、石の面が荒れてアバタ状を呈するものが9点（11・12）、②片面がアバタ状で片面に単独の深い凹みを有するものが6点（15）、③片面がアバタ状で片面が複数の深い凹みを有するものが1点（14）、④両面ともに単独の深い凹みがあるものが2点、⑤片面に単独の深い凹みを有し、もう一方の面に複数の深い凹みがあるものが9点（13）、⑥両面ともに複数の深い凹みの凹石が2点（16）である。また、片面だけに凹みを有する9点のうち、①アバタ状に荒れているものが2点、②単独の深い凹みをもつものが4点、③複数の深い凹みを有するものが3点（17）に細分される。

・石皿（写真11～18～20）

7点出土しているが、完形品は薄くて平らで、縁をもたない石皿（写真11～20）の1点だけで、他はすべて破損品である。石皿として使用している面を見ると、片面が5点、両面が2点ある。片面使用の石皿の形態は、幅広の縁で浅い凹みのものが1点、若干の縁をもって浅い凹みと深い凹みのものが各1点、縁をもたないものが1点、高い縁で深い凹みのものが1点（19）である。両面の石皿は、若干の縁をもって浅く凹んでいる面と高い縁で深い凹みを併せもつものが1点、それに両面ともに縁をもたないではほぼ平らな石皿（20）が1点ある。なお、若干の縁をもって浅い凹みの石皿の中には、側縁に彫刻を施したもの（18）が1点ある。彫刻を施す例はこの1点だけである。石材は安山岩である。

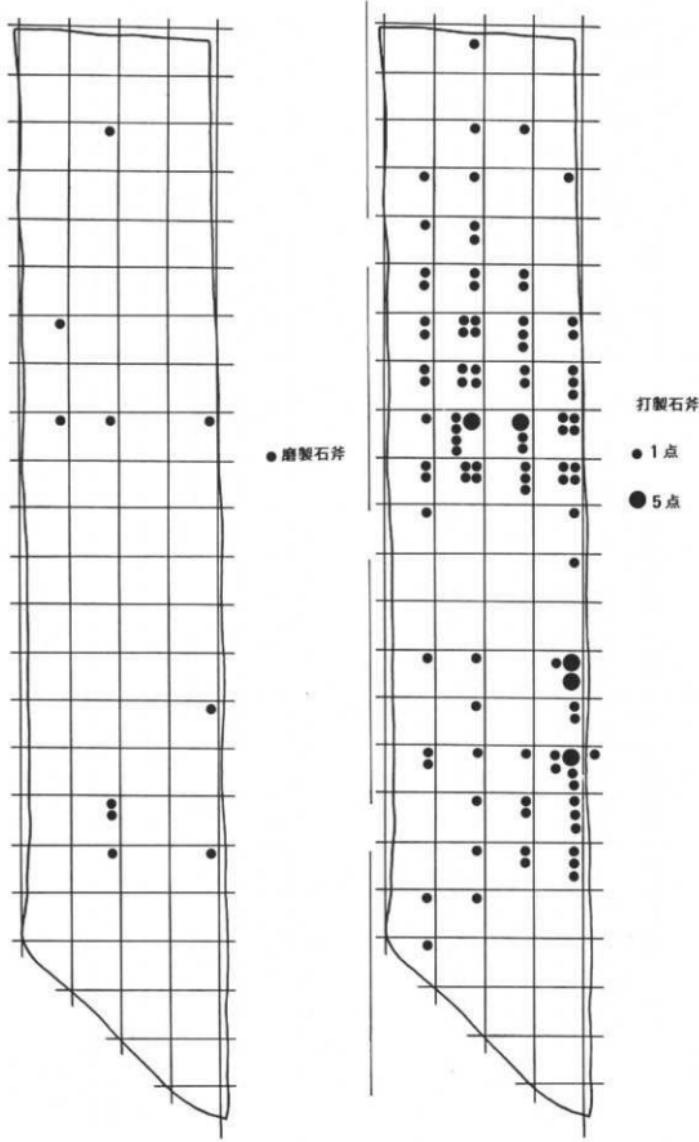


● 石鎌

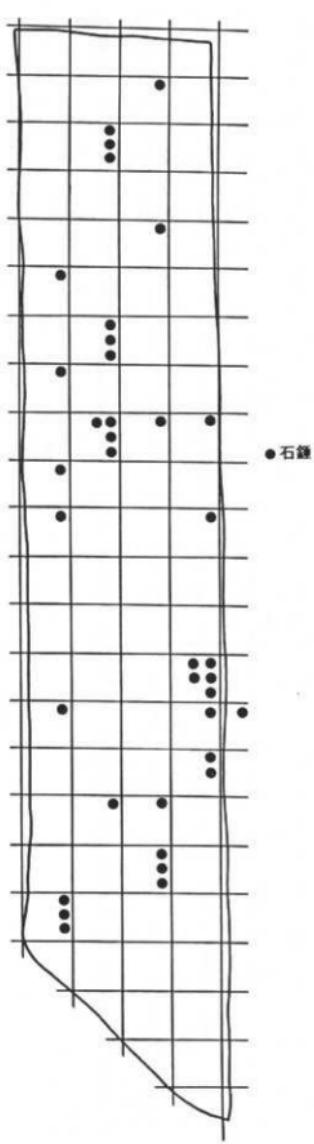


● 石鎌
▶ 石匙
■ 石槍

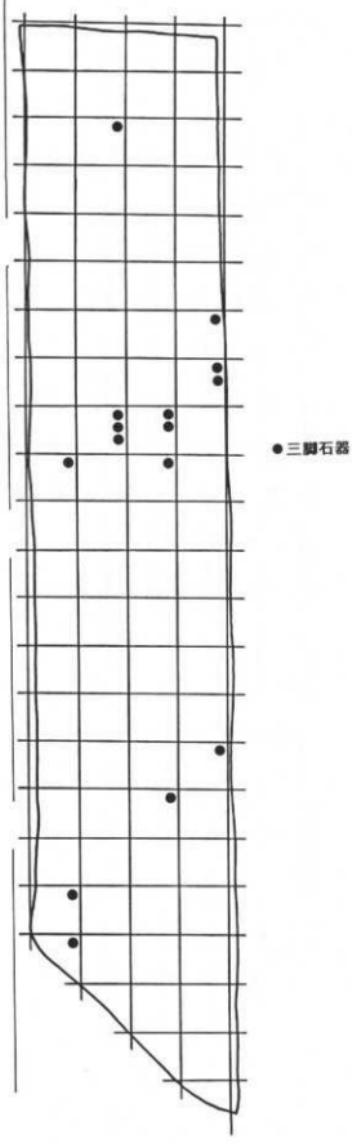
第10図 石器出土分布図（2）



第11図 石器出土分布図（3）

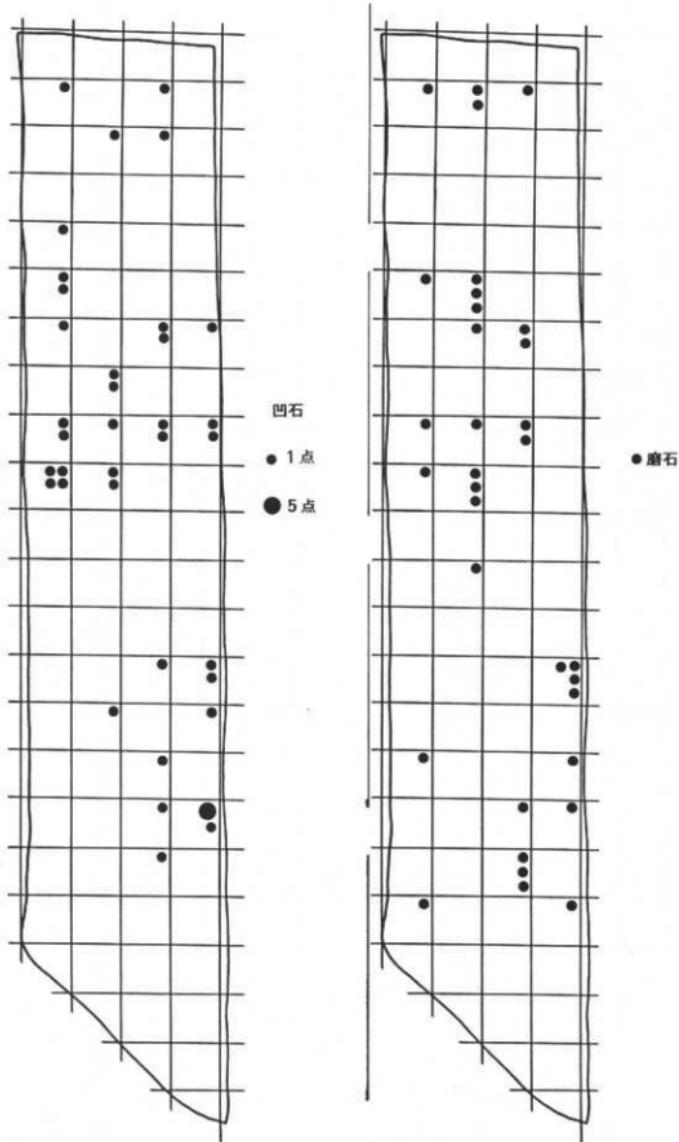


● 石鎚



● 三脚石器

第12図 石器出土分布図（4）



第13図 遺物出土分布図（5）

3 平安時代・中世の遺物（第14図1～8）

平安時代の土師器と須恵器、中世の珠洲焼が出土している。これまでには、外新田で古代や中世の遺物が出土することは、知られていなかった。

・土師器

壺の破片が26点出土しているが、図化できるほどの大きさの破片はない。出土した土師器や須恵器は、時期を特定できるものもなく、不明であるが、土師器の壺の口縁などから平安時代と思われる。

・須恵器（第14図1～8）

須恵器は壺の破片が12点出土しているが、壺や壺などの器種はなかった。第14図1は壺の頸部から肩にかけての大形破片で、外面に格子状の叩き目、内部に同心円の叩き目がある。他の破片の叩き締めの道具は、1と同じ叩き具である。

・中世の遺物（第14図9～14）

珠洲焼の壺と摺鉢の破片が合わせて17点出土している。9～12は壺の破片で、外面に平行叩き目、内面には無文の叩き目の道具を使用して叩き締めている。9は壺の肩の破片で、他は胴部の破片である。13・14は摺鉢で、数条の卸し目を一単位にして下から上へ施している。15世紀代の所産と考えられる。

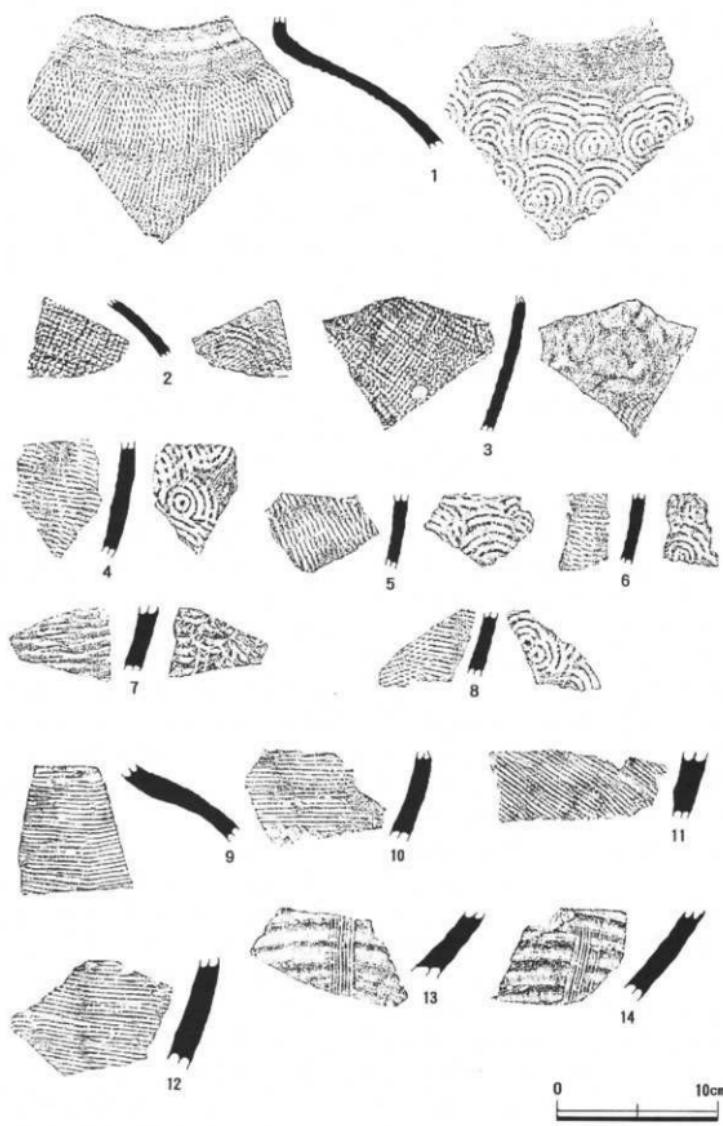
IV ま　と　め

外新田遺跡は、古くから縄文時代の遺跡として知られ、1968年には長岡市立科学博物館と市立岡南中学校の共同で発掘調査を行っている。今回の発掘調査は、復員1mほどの市道を幅8mに拡幅する改良工事などに伴い、遺跡の記録を保存することを目的に実施したものである。

今回の調査では、縄文時代中・後期の遺物とともに平安時代の土師器と須恵器、それに中世の珠洲焼が出土し、断続的ではあるが、縄文時代中期から中世までの長い期間にわたる生活の場となっていたことが判明した。このことは、古代及び中世の遺跡が多数存在する岡南地区に、新たな古代・中世遺跡を加えることになった。岡南地区の六日市町と妙見町には、それぞれに延喜式内社の縁起をもつ三宅神社があり、中湯町には宇都宮神社がある。延喜式内社は、平安時代の前期に編さんされた『延喜式』に載せられている神社で、古くから開けていた土地であることを示している。このことは、岡南地区に古代や中世の遺跡が多数存在することと、深く結び付く現象であろう。

縄文時代では、土掘り具の打製石斧が多数出土していることが注目される。打製石斧は三脚石器を含めた石器の中で30%以上の高い比率で出土し、かつ製作時の剝片が多数出土していることは、外新田で打製石斧の生産が行われていたことを示している。打製石斧が外新田の特産品として他の集落（遺跡）へ運ばれたのか、または破損する頻度が高い労働に備えるために作っておく必要があったのか、などなどのことを考えられる。完形品が50%近い比率で出土していることは、特産品であった一面を窺わせる点であろう。しかし、刃部に使用痕を残す打製石斧が多数あり、スペアが多数必要であったことも考えられる。

また、呪術的な道具の三角形土版や、呪術具との意見がある三脚石器が調査面積に比べて多数出土していることも、外新田の特色である。三角形土版と三脚石器が呪術的な道具であれば、人体そのものを表現し、故意に破損するために作られたという意見がある土偶と、同じ祭祀か、異なる祭祀か、いずれにしろこれらの道具を使っての祭祀が執り行われたことを示している。今後、大量に製作している打製石斧を含めた外新田での生業の在り方と考え合わせ、検討すべき課題である。



第14図 須恵器（1～8）・珠洲焼（9～14）



外新田遺跡遠景（南の山から、写真中央の林が割れている箇所）



外新田遺跡近景（西から）



外新田遺跡遠景（西から）



外新田遺跡近景（南から）



包含層発掘風景



遺構発掘風景



遺構全体写真（南から）



遺構全体写真（北から）

写真1 外新田遺跡発掘調査



竪穴住居跡及びゴミ穴



方形区画の溝跡



土偶出土状況



蓋出土状況



三角形土版出土状況



三脚石器出土状況



打製石斧出土状況



石皿出土状況

写真 2 外新田遺跡発掘調査

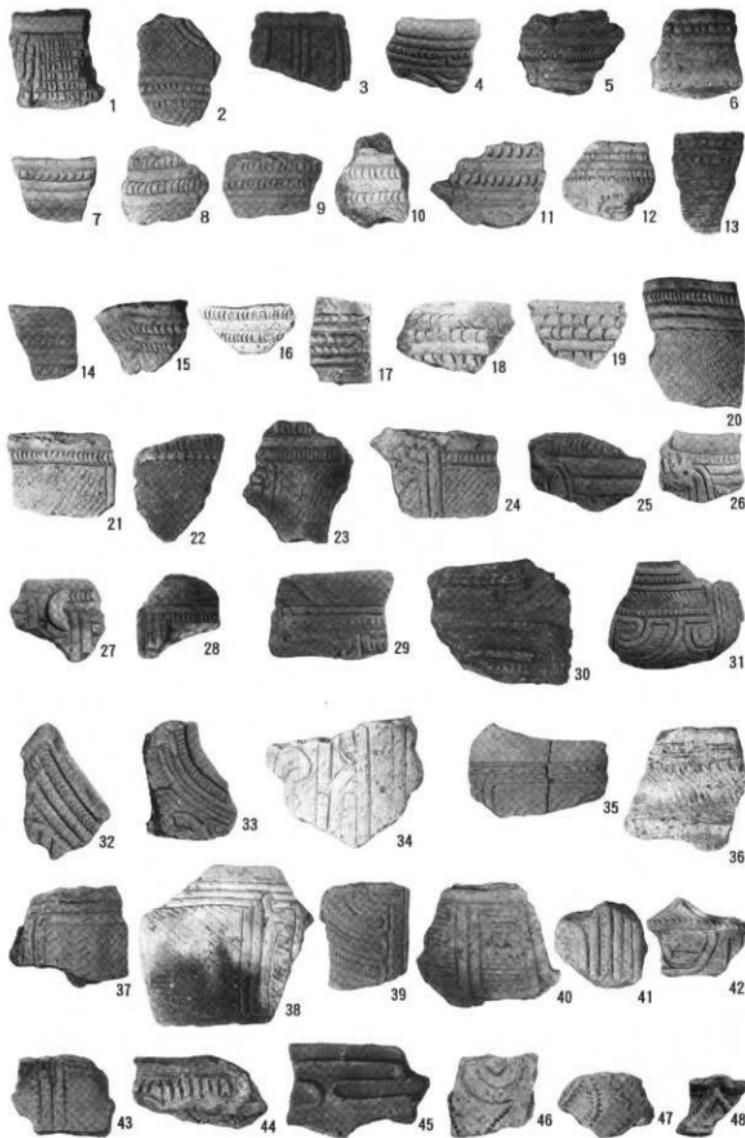


写真3 繩文土器 (1) S = 1 / 3



写真4 繩文土器 (2) S = 1 / 3

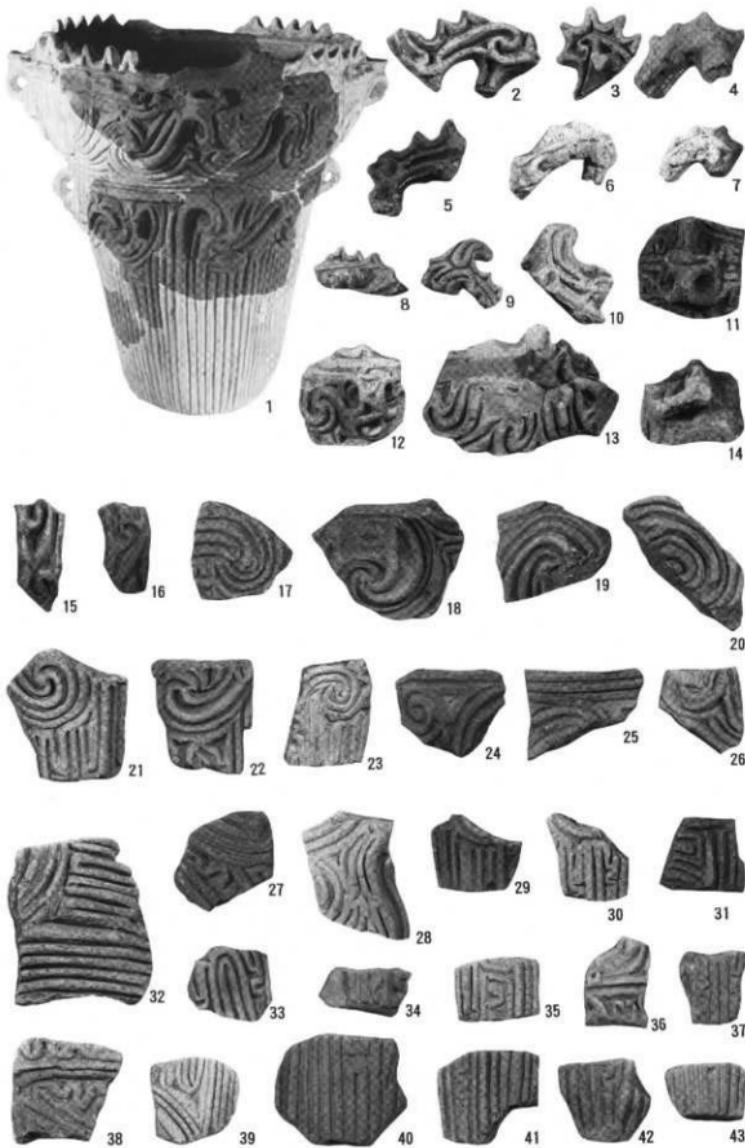


写真5 繩文土器 (3) S = 1 / 3

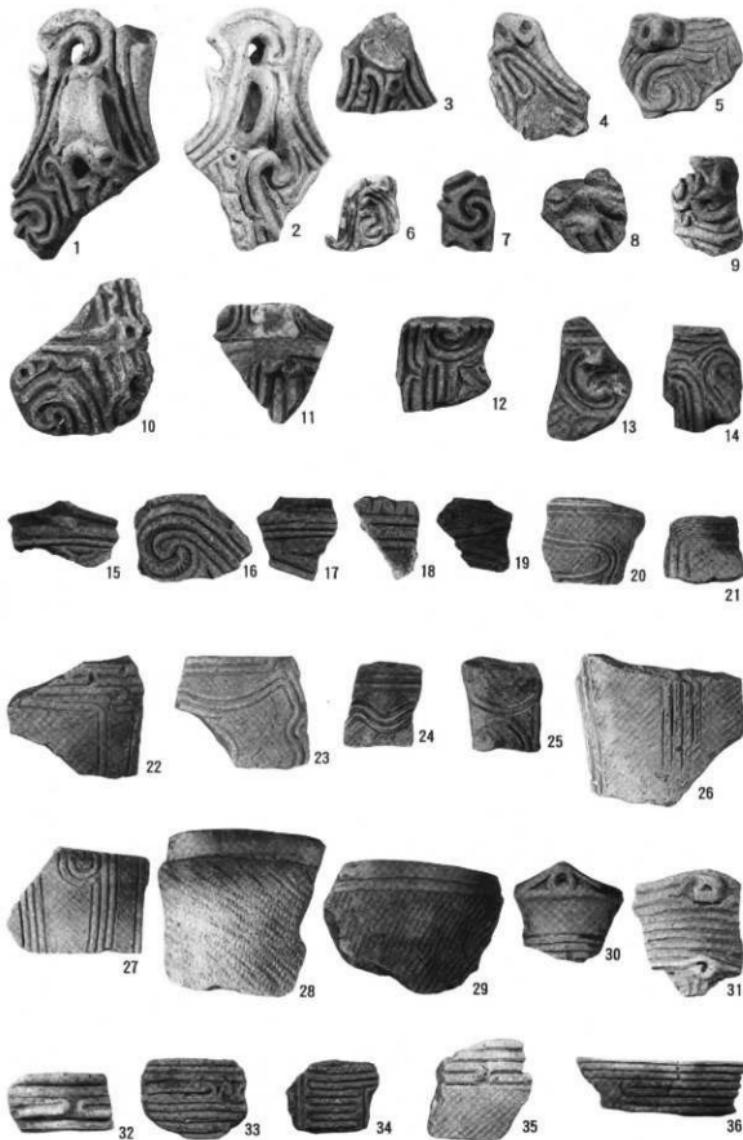


写真 6 繩文土器 (4) S = 1 / 3

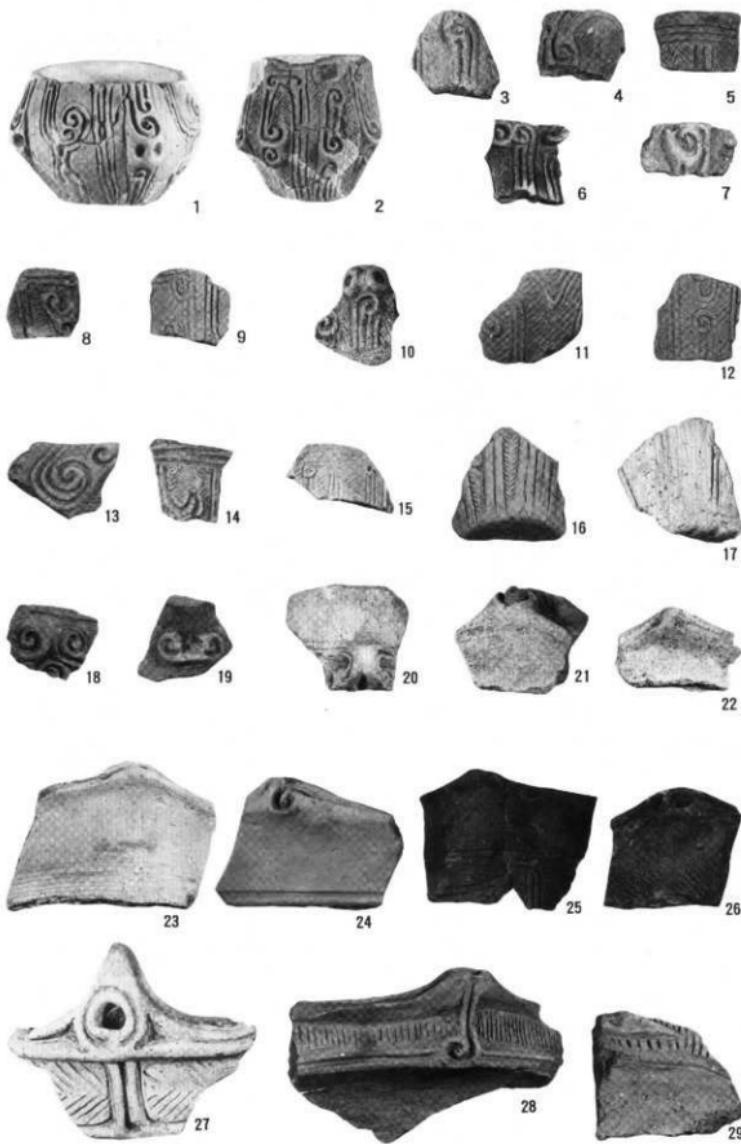


写真7 繩文土器 (5) S = 1 / 3



写真 8 繩文土器 (6) S = 1 / 3

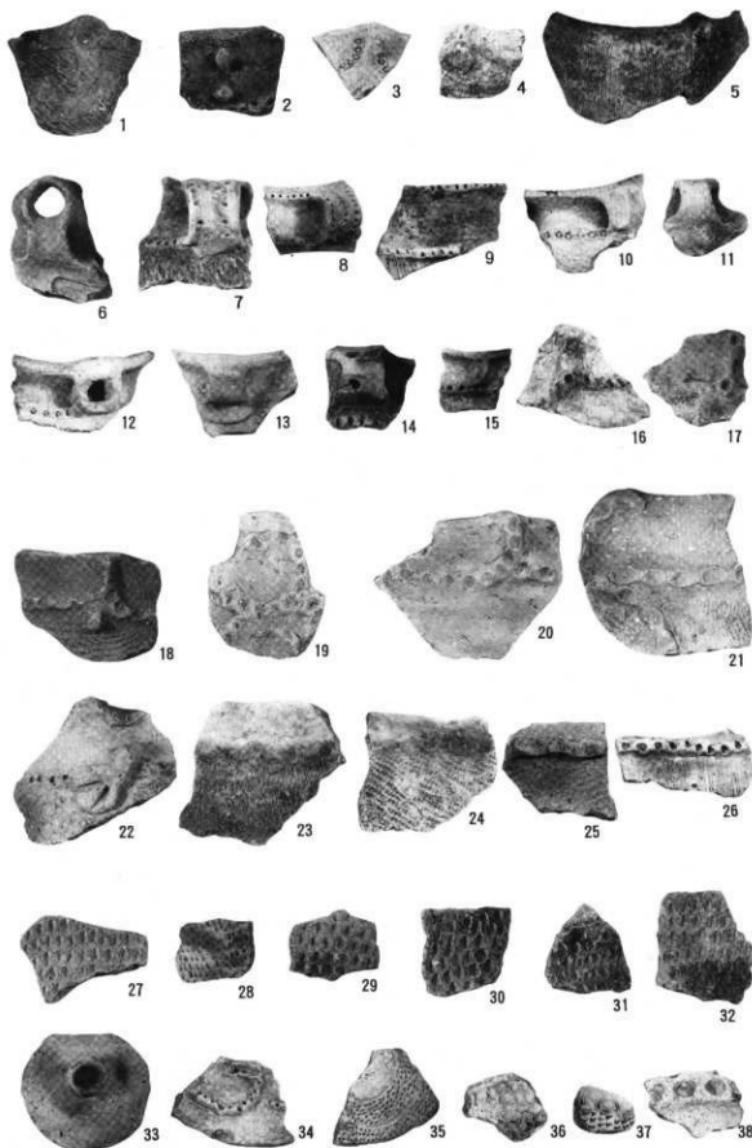


写真9 繩文土器 (7) S = 1 / 3

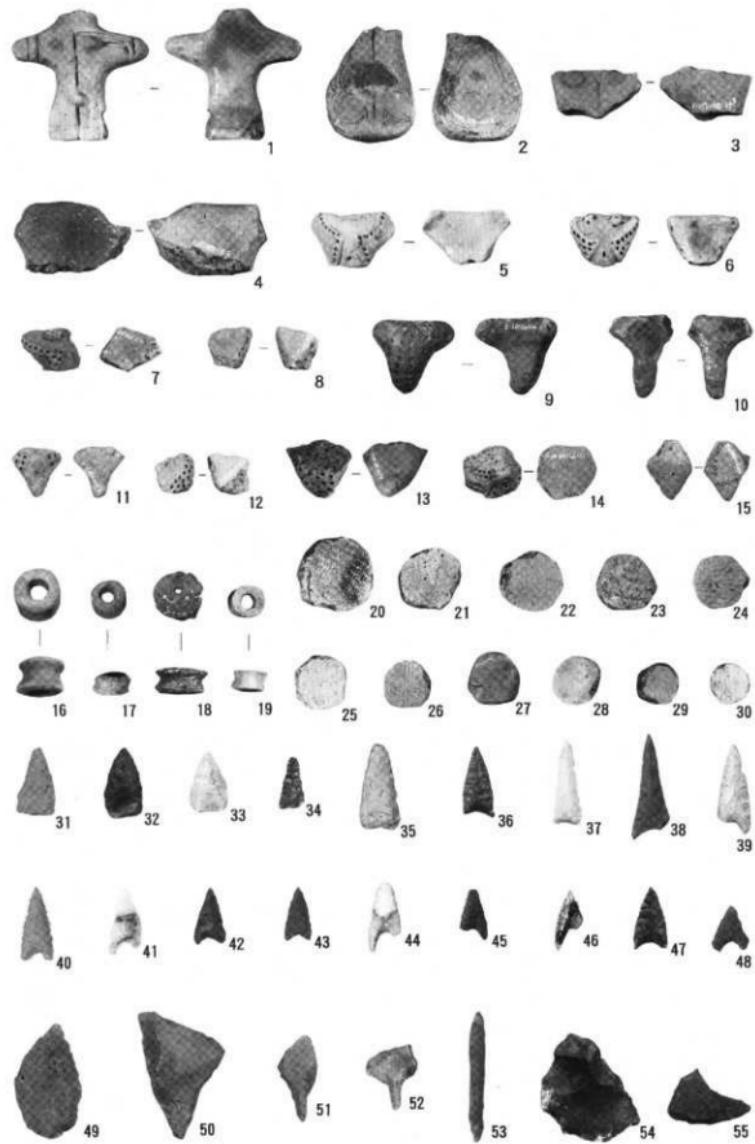


写真10 土製品・石器 (1) S = 1 / 3 (石鏃は 1 / 2.5)



写真11 石器 (2) S = 1 / 3

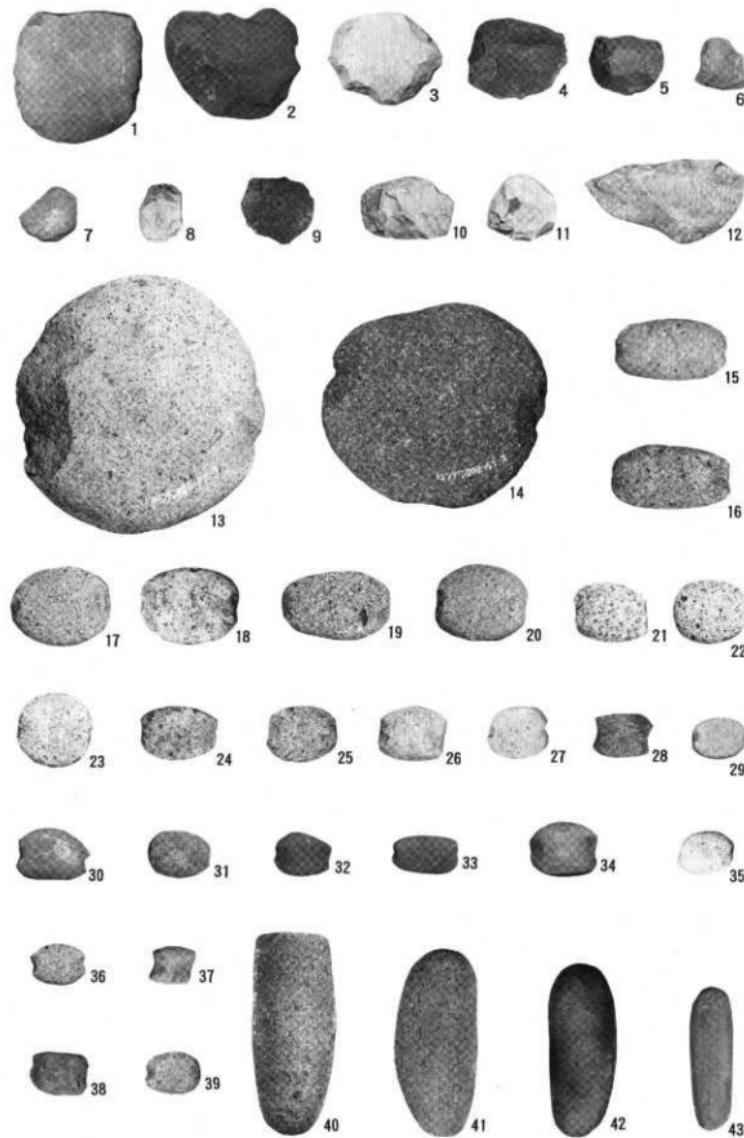


写真12 石器 (3) S = 1 / 3

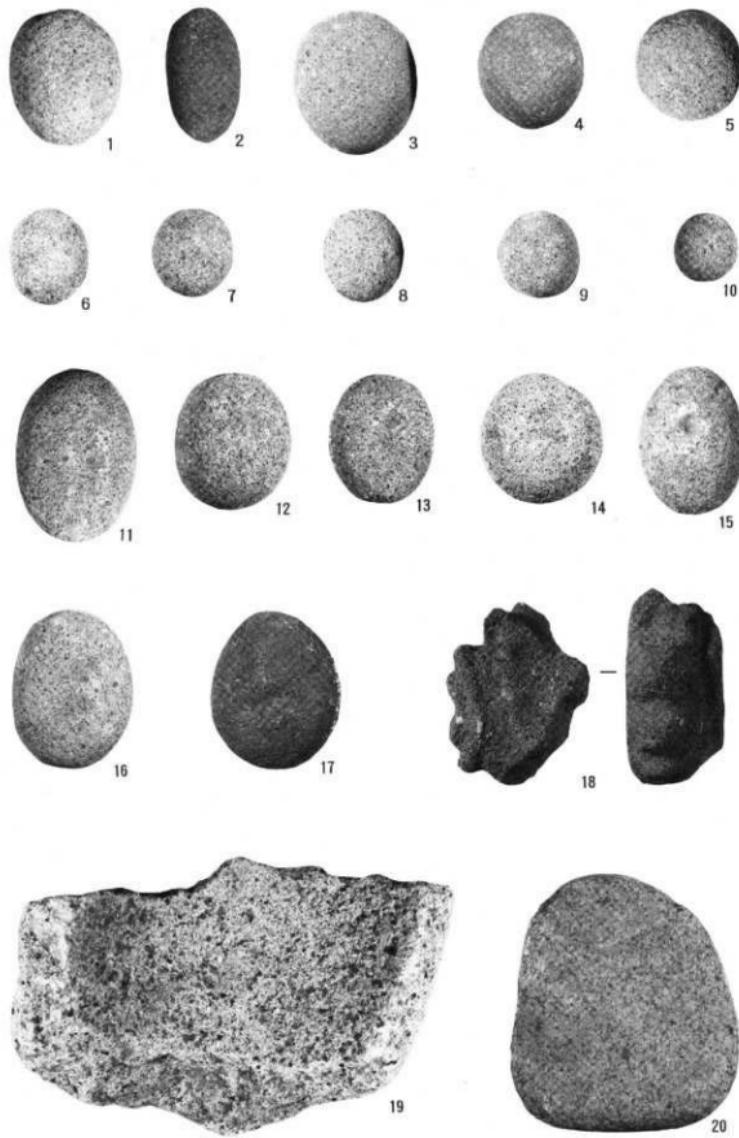


写真13 石器 (4) S = 1 / 3

報告書抄録

ふりがな	としんでんいせき							
書名	外新田遺跡							
副書名								
卷次数								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	駒形敏朗・鳥居美栄							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-8501 新潟県長岡市幸町2-1-1 TEL 0258-39-2240							
発行年月日	1998年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° °'	° °'			
としんでんいせき 外新田遺跡	長岡市中潟町 宇井田割・ 六日市町字 外新田	15202	13	37°20' 95"	138°50' 00"	19970512 ~970711	336	市道改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
外新田遺跡	集落跡	縄文時代 中・後期 平安時代 中世	ピット	繩文土器 打製石斧114、石錐3 石鐵19、三脚石器15 三角形土製品10、 土偶5ほか	コンテナ50箱	開墾時のごみ捨て 穴で大半の遺構が 壊されていた		

外新田遺跡

—市道改良工事等に伴う発掘調査—

平成10年3月25日発行

発行：長岡市教育委員会 印刷：株式会社 第一印刷所